

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 5

1995. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 5

1995. 3

徳島市教育委員会

序文

「水が歴史をつくるまち－徳島」には、先人が残した悠久の歴史を証す文化遺産が数多く遺存しております。

その中の一つとして、開発事業に伴う発掘調査により明らかにされます数々の埋蔵文化財にも、かつて徳島の地に生活した先達の心が込められております。これらを学び受け継ぐことは、21世紀に向けて歴史が生きる文化創造性の高いまちづくりに通ずるものと思われます。

本市では、開発と文化財保護の両者を円滑に調和すべく発掘調査の実施により、多大な成果をおさめています。

本書は、発掘調査の成果を一冊の報告書としてまとめたものですが、生涯学習および歴史教育、さらには学術研究の場において、埋蔵文化財に対するより深い理解を得られますことに、微力なりとも寄与することができれば幸甚かと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

1995年3月31日

徳島市教育委員会

教育長 小林 實

例　　言

- 1 本書は平成元～5年度に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴い実施した発掘調査のうち、2遺跡3件についての概要報告書である。
- 2 報告の対象となった遺跡名・調査原因・調査場所・調査期間・調査面積は各章の文頭に掲載した。
- 3 本書の作成は各調査担当者（三宅良明・勝浦康守）が執筆し目次欄に担当名を記した。なお編集は勝浦が行った。
- 4 発掘調査は徳島市教育委員会が主体となり本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。
- 5 出土遺物、図面、写真の整理等、報告書作成に関する作業は各担当者が行った。また資料整理、報告書作成には下記の方々の協力を得た（敬称略）。
市川欣也　倉佐晃次　高木　淳　佐伯俊裕　中野勝美　山口文子　折野絵美　青木健司
- 6 発掘調査に伴う日誌、写真、図面、台帳、出土遺物は徳島市教育委員会が保管する。
- 7 発掘調査を実施するにあたり、開発申請者ならびに多数の関係諸氏に多大な御配慮をいただいた。記して感謝の意を表する。



調査地位置図 I 南庄遺跡 II 南庄遺跡 III 庄遺跡
(国土地理院発行50,000分の1図幅「徳島」「川島」使用)

目 次

序文

例言

本文目次

I	南庄遺跡発掘調査概要.....	(三宅)	1
	－マンション建設工事に伴う発掘調査－		
II	南庄遺跡発掘調査概要.....	(勝浦)	15
	－住宅開発工事に伴う発掘調査－		
III	庄遺跡発掘調査概要.....	(勝浦)	23
	－加茂名小学校校舎建設工事に伴う発掘調査－		

挿図図版

写真図版

挿図図版

I 南庄遺跡発掘調査概要

－マンション建設工事に伴う発掘調査－

第1図 調査地位置図

第2図 検出遺構図

第3図 土壌SK21出土遺物

第4図 土壌SK15(2, 3), SK21(4~9), SK23(10~12)出土遺物

第5図 土器溜りSR01出土遺物

第6図 竪穴住居跡SA01(18, 19), 土壌SK04(20)出土遺物

第7図 竪穴住居跡SA01(21~25), SA02(26, 27), SA03(28~30)出土遺物

第8図 竪穴住居跡SA01(31~33), SA02(34~44)出土遺物

第9図 竪穴住居跡SA02遺物

第10図 土壌SK01(48~53), SK02(54~57), SK03(58), SK13(59)出土遺物

第11図 溝SD05(60), 土壌SK08(61)出土遺物

第12図 河川跡出土遺物

第13図 河川跡出土遺物

II 南庄遺跡発掘調査概要

－住宅開発工事に伴う発掘調査－

第1図 調査地位置図

第2図 遺構配置図および堆積土層図

第3図 溝SD01(1, 2), SD02(3), SD06(7), Pit01(4), 不明落込SX01(5, 6)出土遺物

第4図 溝SD01出土遺物

III 庄遺跡発掘調査概要

－加茂名小学校施設建設工事に伴う

発掘調査－

第1図 調査地位置図

第2図 遺構配置図および堆積土層図

第3図 旧河道SX01出土遺物

第4図 溝SD01出土遺物

第5図 溝SD01出土遺物

写真図版

- I 南庄遺跡発掘調査概要
—マンション建設工事に伴う発掘調査—
- 図版 1 調査地全景
- 図版 2 上：土壌SK15甕(2), 壺(3)出土状況
下：土壌SK21甕(5, 6), 壺(8), 石製品(1)ほか出土状況
- 図版 3 上：土壌SK23甕(10, 11), 壺(12)ほか出土状況
下：竪穴住居跡SA01
- 図版 4 上：竪穴住居跡SA02
下：竪穴住居跡SA02甕(27), サヌカイト剥片出土状況
- 図版 5 上：河川跡
下：河川跡埋土上層壺(75, 76), 出土状況
- 図版 6 上：河川跡埋土上層壺(65, 67), 大型蛤刃石斧片出土状況
下：溝SK01, 03, 05, 06, 竪穴住居跡SA04ほか
- 図版 7 土壌SK1(2, 3), SK21(1, 5, 7, 8)出土遺物
- 図版 8 土壌SK23(10~12), 土器溜まりSR01(13, 15, 16)出土遺物
- 図版 9 竪穴住居跡SA01(18, 19, 21), SA02(26, 27), SA03(29, 30), 土壌SK04(20)出土遺物
- 図版10 竪穴住居跡SA01(31~33), SA02(34~47)出土遺物
- 図版11 河川跡出土遺物
- 図版12 河川跡(79, 80, 84~88), 土壌SK03(58), SK08(61), SK13(59), 溝SD05(60)出土遺物
- II 南庄遺跡発掘調査概要
—住宅開発工事に伴う発掘調査—
- 図版 1 上：調査地全景
下：溝SD01検出状況
- 図版 2 上：溝SD01出土遺物
下：溝SD01出土遺物
- III 庄遺跡発掘調査概要
—加茂名小学校施設建設工事に伴う発掘調査—
- 図版 1 上：調査地I区全景
下：調査地I区溝SD01杭列
- 図版 2 上：調査地II区全景
下：調査地II区旧河道SX01
- 図版 3 溝SD01出土遺物
- 図版 4 溝SD01出土遺物
- 図版 5 溝SD01出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とくしましまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいよう
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要
副書名	
卷次	5
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	三宅良明・勝浦康守
編集機関	徳島市教育委員会
所在地	〒770 徳島市幸町2丁目5番地 Tel0886-21-5418
発行年月日	西暦 1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
みなみ 南	しょう 庄	とくしまんとくしまし 徳島県徳島市 みなみしょうち 南庄町	36201	—	34度 4分 4秒	134度 30分 34秒	19940224～ 19940331	260	マンション 建設に伴う 事前調査
みなみ 南	しょう 庄	とくしまんとくしまし 徳島県徳島市 みなみしょうち 南庄町	36201	—	34度 4分 5秒	134度 30分 39秒	19920110～ 19920220	420	住宅開発に 伴う事前調 査
しょう 庄		とくしまんとくしまし 徳島県徳島市 じょううち 庄町	36201	—	34度 4分 14秒	134度 30分 29秒	19891201～ 19891220 19900710～ 19900720	200 100	学校施設建 設に伴う事 前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南 庄	集落跡	弥生 古墳	竪穴住居跡 溝・土壙・旧河道	弥生土器、磨製石斧 石錐、石鎚、菅玉 土師器、須恵器、石錘、 銅鏡	
南 庄	集落跡	平安 中世	溝	土師器、瓦器、白磁 瓦器	
庄	集落跡	平安 近世	旧河道 溝	黒色土器、土師器 肥前陶磁器	

I 南庄遺跡発掘調査概要

—マンション建設工事に伴う発掘調査—

I 南庄遺跡発掘調査概要

—マンション建設工事に伴う発掘調査—

調査場所 徳島市南庄町5丁目19-1, 20

調査期間 平成6年2月24日～3月31日

調査面積 約260m²

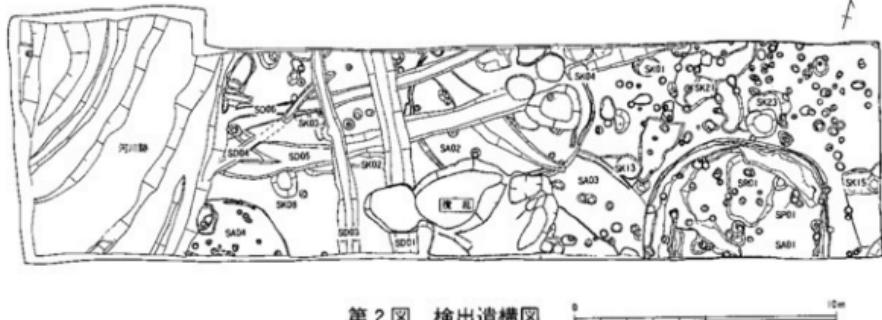
I 調査に至る経緯と経過（第1図）

南庄遺跡は、鮎喰川水系の旧河川の沖積作用によって形成された微高地上に立地する、弥生時代・古墳時代を中心とする県内屈指の集落遺跡である。

都市計画街路南庄・南佐古線建設工事に伴い昭和60年から4カ年5次にわたり実施された発掘調査では、旧河川や濠状遺構、またそれらによって区切られた居住域において、弥生時代中・後期の竪穴住居跡、古墳時代中～後期の方形竪穴住居跡、掘立柱建物跡などの遺構や膨大な量の遺物が出土している。

今回の調査地は、その南庄・南佐古線地区から北へ80mに位置する。事前の試掘調査で遺構の存在が確認され、届出者との協議において建物基礎構築部分についての全面発掘調査を実施するに至った。調査は重機による水田耕作土掘削後、黄色シルト層上面で精査を行い遺構の検出に努めた。





第2図 検出構造図

2 調査の概要（第2図、図版1）

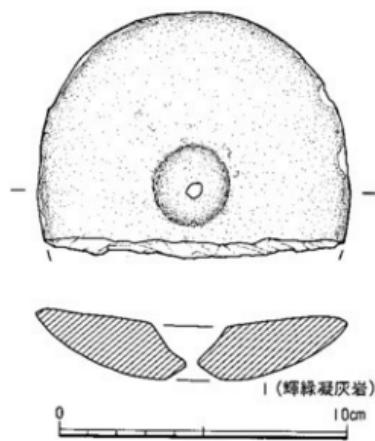
調査地の標高はT.P.+5.5mである。後世の削平により遺物包含層はほとんど存在せず、旧水田層が部分的に薄く残るが、概ね現水田直下25~30cmで遺構面の黄色シルト層となる。今回の調査では、この黄色シルト層一面で弥生~古墳時代の遺構として竪穴住居跡、土壙(土器溜まり)、河川跡、溝、ピット等を検出した。以下おもな遺構と出土遺物について概説する。

(1) 土壌 SK15, 21, 23 (第3, 4図, 図版2, 3)

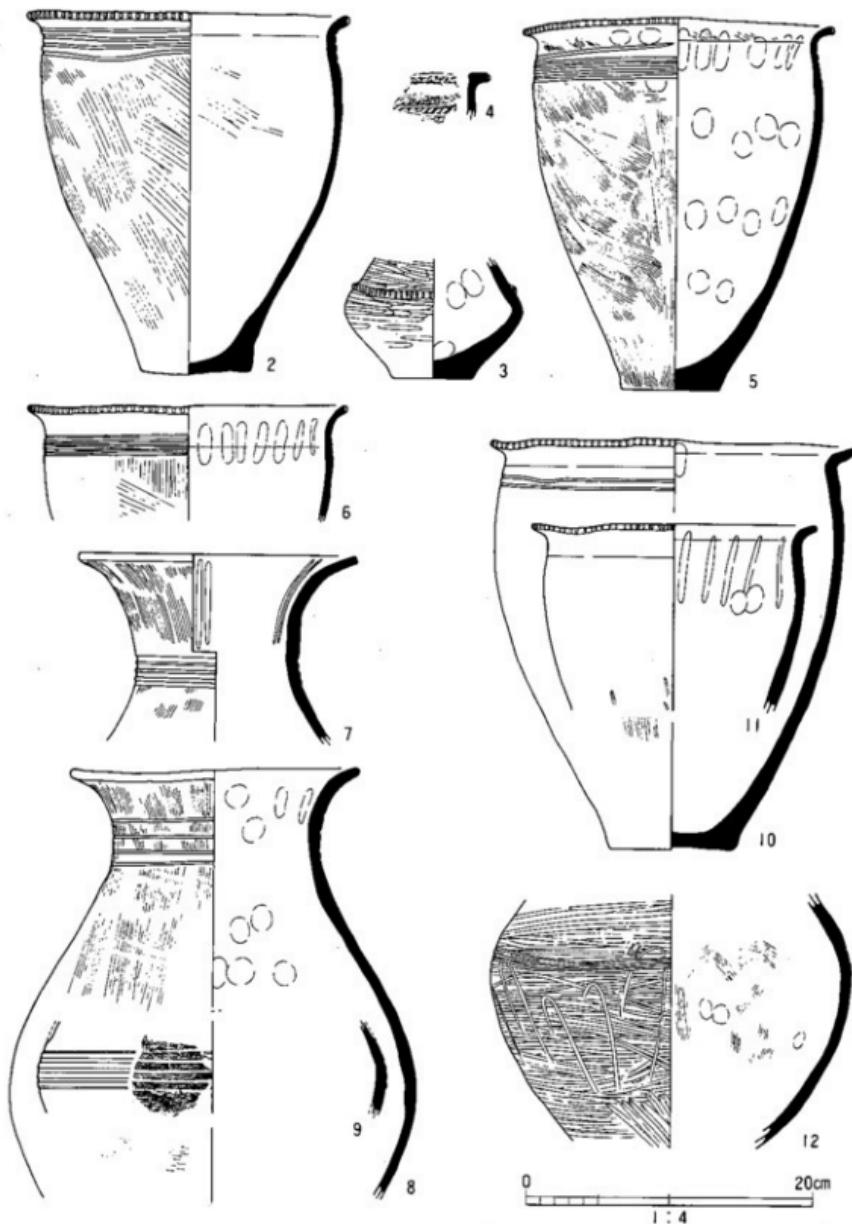
調査区内において、弥生時代前期後半の土壌3基を検出した。いずれもくすんだ黄褐色系の埋土で、SK21については掘形ラインの検出が容易ではなかった。

土壤SK15, 21はいずれも平面形が $1.2\text{m} \times 0.9\text{m}$ の不整方形で深さは15~20cmを測る。SK15からは甕(2), 壺(3)が, SK21からは甕(4~6), 壺(7~9)と, 環状石斧の未成品であろうか有孔石製品(1)が出土している。

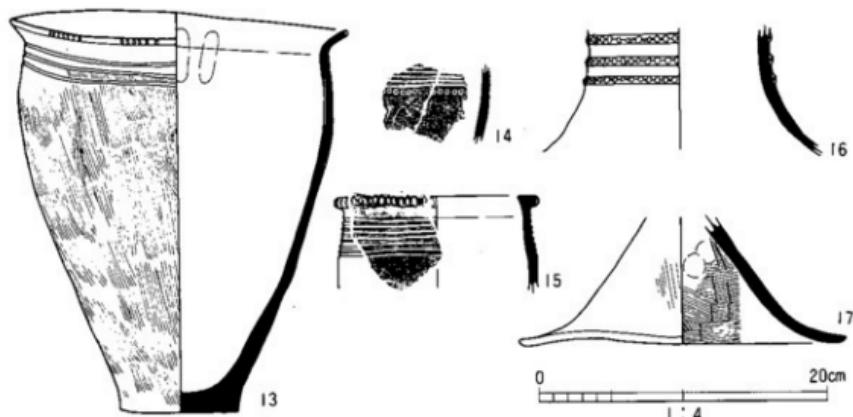
甕(2, 5, 6)はいずれも倒鐘形の体部に4~5条のヘラ描沈線をめぐらせ、口縁部に刻目を施すものであるが、SK21ではいわゆる逆L字形口縁をなす甕の破片(4)が1点認められる。ヘラ



第3図 土壙SK21出土遺物



第4図 土壌SKI5 (2, 3), SK21 (4~9), SK23 (10~12) 出土遺物



第5図 土器溜りSR01出土遺物

描沈線の間に刺突文を施すものである。壺（3）は横方向のヘラ磨きが施された扁球形の体部に1条の貼付刻目突帯をめぐらす小形品である。壺（7）は細頸の広口壺で、頸部に4条のヘラ描沈線をめぐらせ、口縁内面には4対のヘラ描文を上下方向に施す。壺（8）は太頸の広口壺で頸部に4条のヘラ描沈線をやや間隔をあけてめぐらす。なおSK21からは、体部に幅2.7cmの削出突帯を有し、その上面に3条のヘラ描沈線を施した壺の破片（9）が出土している。

SK23は1.6m×1.1mの楕円形で深さ30~40cmを測る。出土甕にはヘラ描沈線を2条めぐらす甕（11）とめぐらさない甕（12）があり、壺（12）は、頸部を欠くが精緻にヘラ磨きされた球形の体部に3条のヘラ描沈線をめぐらす。

なお、これらいづれの土器の胎土にも平均3mm前後の砂粒を多量に混入させている。

(2) 土器溜り SR01

後述する竪穴住居跡SA01の床面で検出された深さ15cm前後の浅い落ち込みで、埋土中より弥生時代前期後半の土器が出土しており、SA01に先行する遺構もしくは包含層の可能性が考えられる。出土土器の量は多くないが、ここでは土器溜まりとしてその出土遺物のいくつかを掲げる（第5図）。

出土遺物は甕（13~15）、壺（16）、甕の蓋（17）などである。甕（13）は口縁部に刻目、体部に3条のヘラ描沈線を施す。甕（14）は5条以上のヘラ描沈線下部に竹管文を施した体部の破片である。甕（15）は復元口径14.3cmの小ぶりの甕で逆L字形口縁をなす。体部

には7条のヘラ描沈線を施す。壺(16)は細頸(広口)壺の頸部で、4条以上の貼付刻目突帯を施す。また同形態の壺で、頸部に6条以上の貼付刻目突を施したもののが破片も出土している。土器の胎土にはいずれも大粒の砂粒を多量に混入させている。

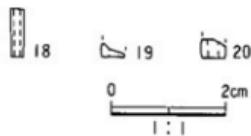
(3) 竪穴住居跡 SA01～04

今回の調査では4棟の竪穴住居跡を確認したが、いずれもその一部を検出したにすぎない。先述のとおり後世の耕作等に伴う遺構面削平により、いずれの住居跡も側壁をほとんど残しておらず、またこうしたことから遺構内に時期の異なる遺物が混在する状況も認められ、遺構の時期決定にはなお検討の余地を要するものも存在するが、主たる土器の出土状況や他の遺構との切り合い関係などから、4棟の竪穴住居跡はいずれも概ね弥生時代中期後半に位置づけることが可能である。

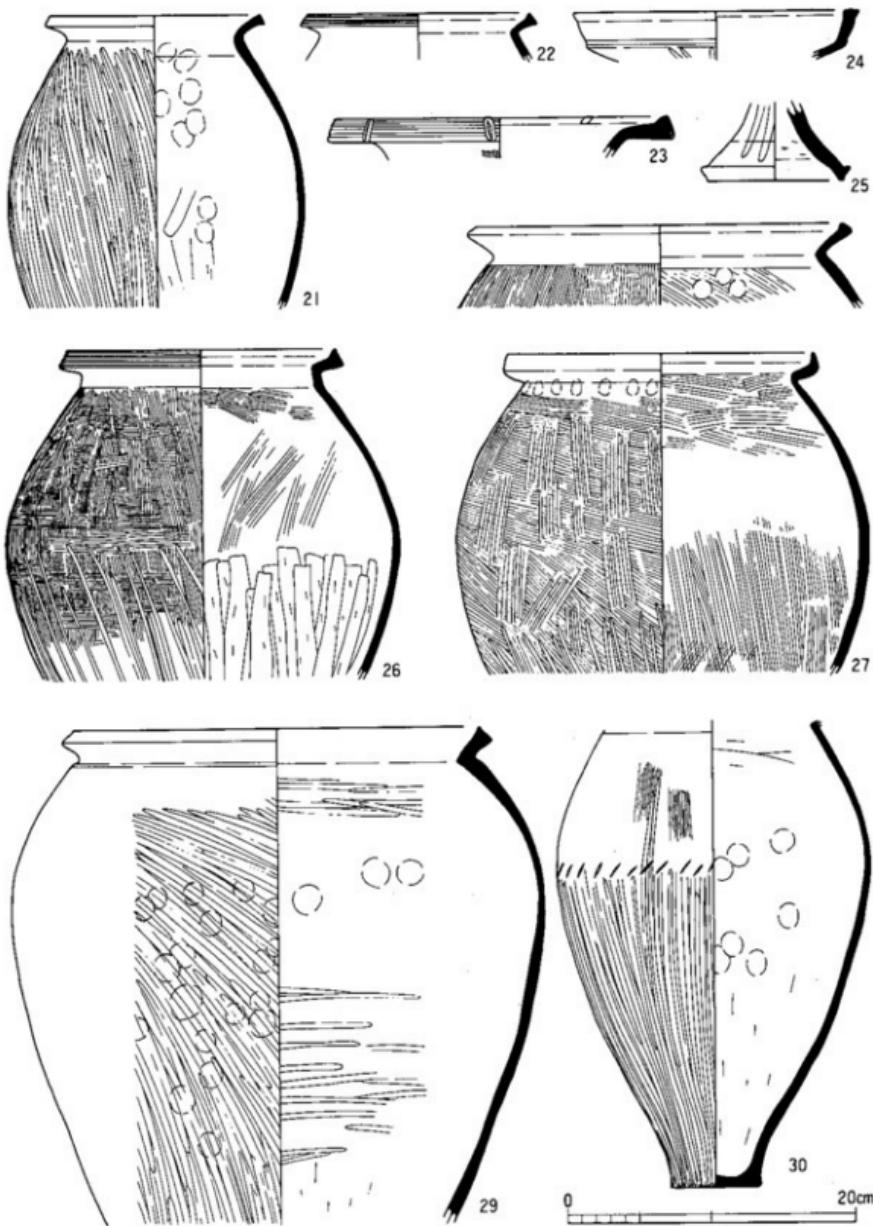
竪穴住居跡SA01(図版3)は全体のほぼ北半部を検出した。黄褐色混じりの黒色シルトを埋土とし、平面形は一部隅丸方形形状を呈する不整円形で直径(東西)7.2mを測る。壁高は平均7cm程度と低い。側壁沿いには、通常見られる壁溝が幅10～15cm、深さ5cm前後でめぐるが、その内側には、幅が20cm～1mと不規則で深さ20cmほどの溝状の遺構が、ほぼ壁溝に沿って検出され、一部が住居跡中央部へと延びていた。

この溝状遺構の性格は不明だが、これにより床面のフラットな部分はかなり狭くなり、通常の住居跡形態としては解釈しにくい点がある。主柱穴と考えられるものは環状に配されており、7基が検出されたが柱穴の間隔は1～1.2mと狭い。柱穴SP01では結晶片岩を根石に用いていた。出土遺物には碧玉製管玉(18, 19)、甕(21, 22)、壺(23)、高坏(24, 25)、石槍(31)、石錐(32, 33)、石鎌などがある(第6～8図、図版9, 10)。

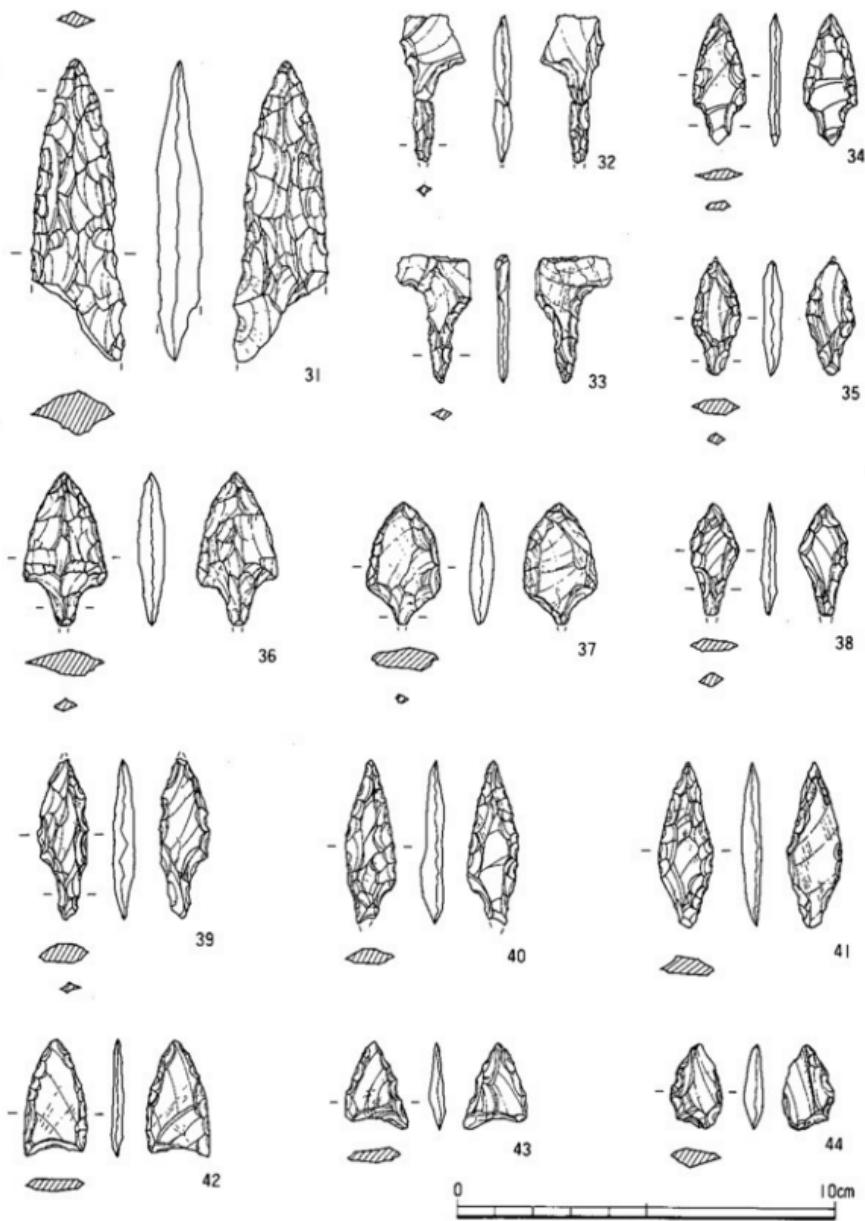
竪穴住居跡SA02(図版4)は直径7.1mの円形住居跡で、西側に約30cmの張出部状の痕跡が認められる。高さ5～10cmの壁沿いには幅10～20cm、深さ5～10cmの壁溝がめぐる。主柱穴は環状に配され、1.22～1.6m間隔で8～9柱が配置されていたと想定される。中央には1.2m×40cm、深さ20cmの平面梢円形の炉跡を有する。床面の多量のサヌカイト剝片をはじめ、石鎌(34～44ほか)、有溝石錐(45)、扁平片刃石斧(46)、柱状片刃石斧(47)などの石器類と、甕(26, 27)など僅かな土器片が出土している(第7～9図、図版9, 10)。有溝石錐(45)は卵形で、長軸方向に溝を1条めぐらせたものである。柱状片刃石斧(47)は後主面に浅い抉りを施している。甕(26, 27)の体部外面はいずれも縦横の刷毛調整の



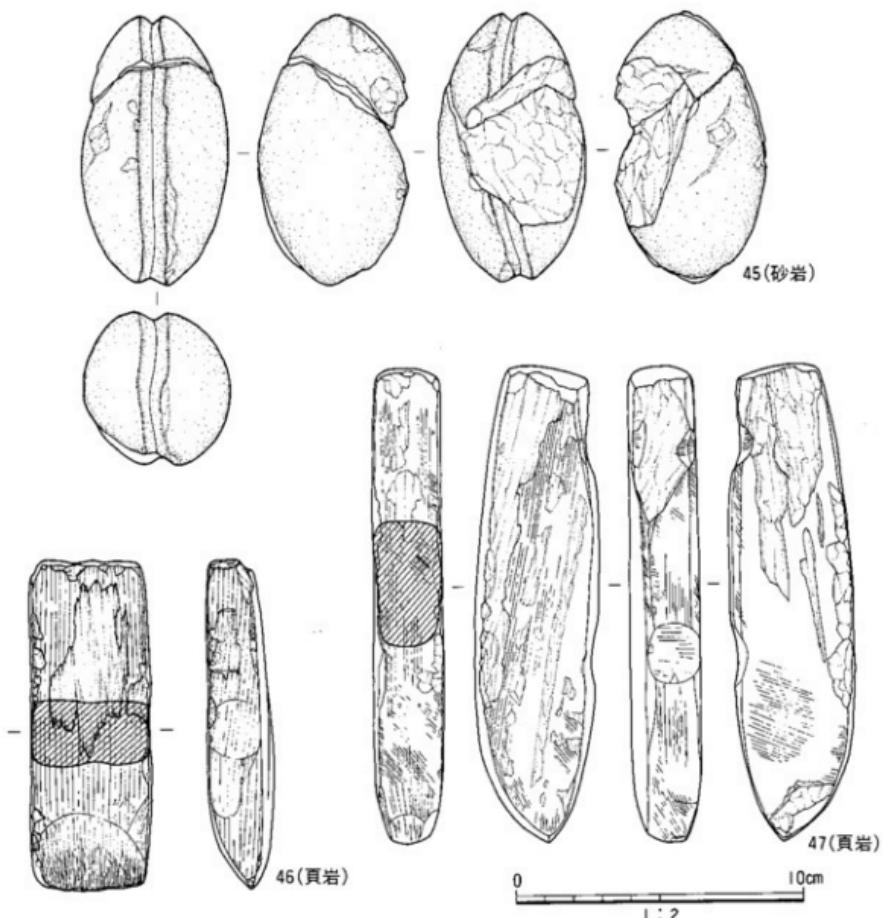
第6図 竪穴住居跡SA01(18, 19)、土壤SK04(20)
出土遺物



第7図 堅穴住居跡SA01 (21~25), SA02 (26, 27), SA03 (28~30) 出土遺物



第8図 堅穴住居跡SA01 (31~33), SA02 (34~44) 出土遺物



第9図 壇穴住居跡SA02出土遺物

後、下半部に縦方向のヘラ磨きを施す。甕(26)の口縁外面には3条の凹線をめぐらす。

壇穴住居跡SA03はSA01, SA02に切られ、また搅乱によって大部分が崩失し、全体の1/4弱を検出したにすぎない。復元径8m、壁高10cmの円形住居跡で、幅20cm前後の壁溝を持つ。出土遺物は甕(28~29)、石鎌などである。甕(29)は肩部が大きく張る大型の甕である。甕(30)は体部下半部に縦方向のヘラ磨きを施し、中央部に刺突文をめぐらす。

壇穴住居跡SA04は全体の北半部を検出したが、その西端部は河川によって切られる。復元径6m、壁高5~10cmの円形住居跡で一部壁溝の痕跡をとどめる。中央に炉跡が存在す

る。弥生土器片、石鎌、石核（サヌカイト）などが出土している。

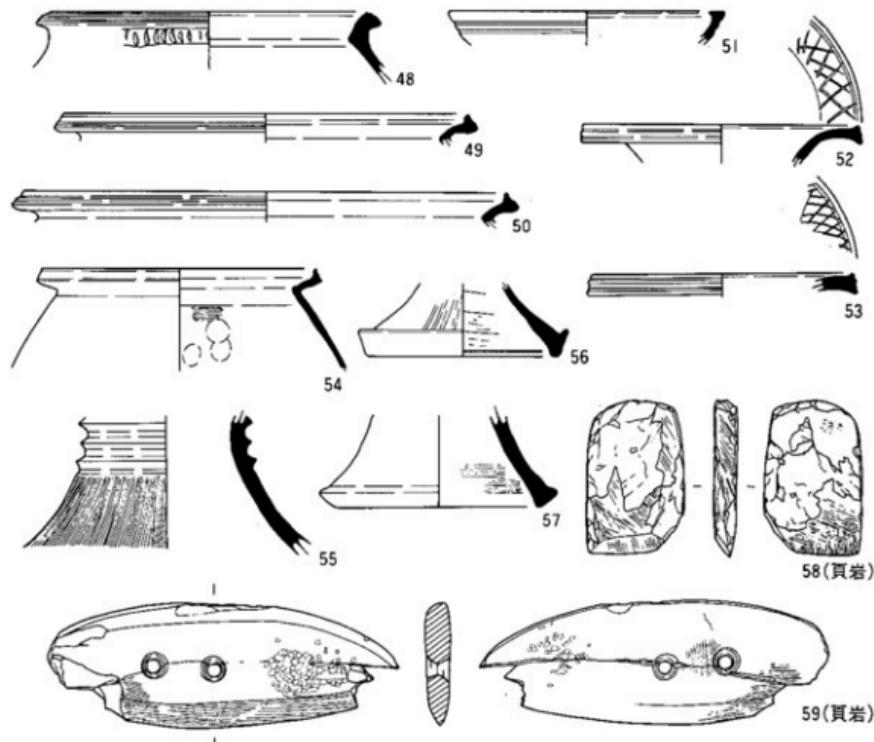
(4) 土壙 SK01～04, 13 (第10図)

出土遺物は僅少であるが、いずれも弥生時代中期後半に位置づけられる土壙である。

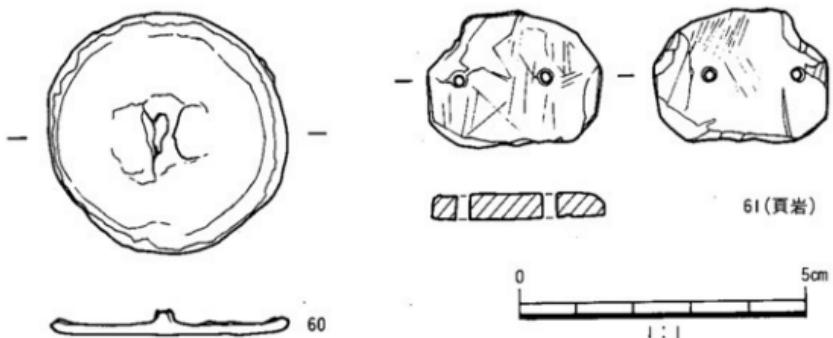
土壙SK01は1.1m×80cmの平面橢円形で深さ50cmを測る。甕(48～50), 高坏(51), 壺(52, 53)などが出土している。壺(52, 53)はいずれも口縁端面に2～3条の凹線をめぐらせ、内面にヘラ描斜格文を施す。

土壙SK02は溝SD05, 01, 03に切られる。1.7m×60cmの平面長方形で深さ30cmを測る。埋土は灰黄褐色の砂質シルトで甕(54), 壺(55), 高坏(56, 57)などが出土している。壺(55)は頸部に断面三角形の突帯をもつものである。

土壙SK03は溝SD03, 06に切られる。90cm×60cmの平面不整円形で深さ25cmを測る。土器



第10図 土壙SK01 (48～53), SK02 (54～57), SK03 (58), SK13 (59) 出土遺物



第11図 溝SD05 (60), 土壙SK08 (61) 出土遺物

片と扁平片刃石斧（58）が出土している。

土壙SK04は80cm×60cm, 深さ40cmの平面方円形の土壙で、碧玉製管玉の欠損品（20）、石鎌などが出土している。

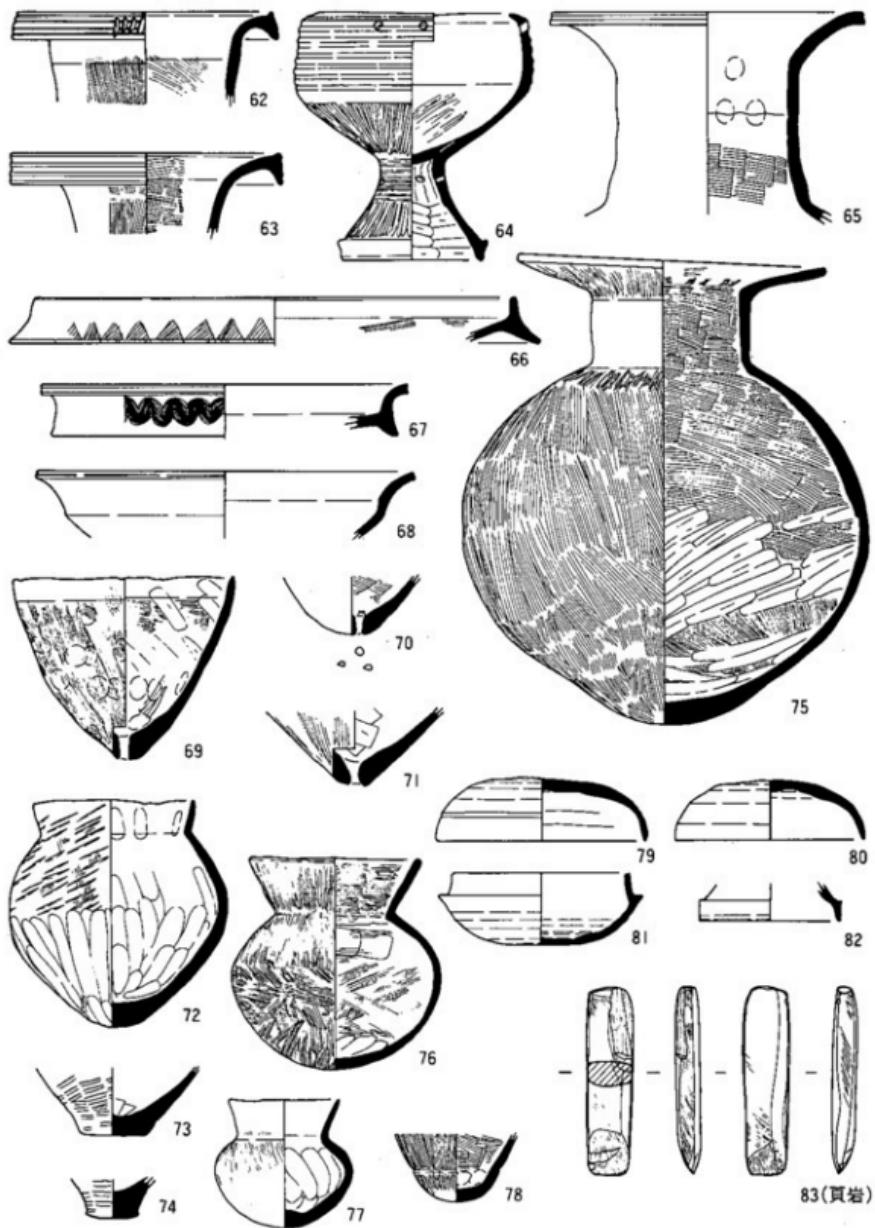
土壙SK13は竪穴住居跡SA03の脇で検出された1m×80cmの平面方円形の土壙で、深さは40cmを測る。僅かな土器片と、長辺方向に半折した磨製石庖丁（59）が出土している。石庖丁（59）は頁岩製で、刃部、背部とともにやや外湾する細身の楕円形態である。両刃であるが、一方（裏面側）の刃面はさほど明瞭でない。紐部は2孔で、長辺の中心部よりややずれた位置に穿たれている（第10図、図版12）。

(5) 土壙 SK08

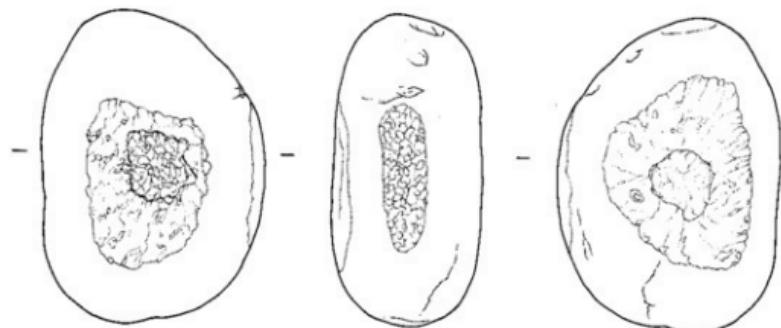
径1m、深さ30cmの土壙で、溝SD05によって切られる。有孔石板（61）が出土している。有孔石板（61）は横幅3cm、縦幅2.3cm、厚さ4mmの頁岩製で、丸瓶に似た蒲鉾形を呈し、2孔が穿たれている（第11図、図版12）。

(6) 河川跡（図版5、6）

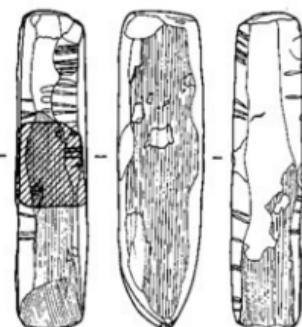
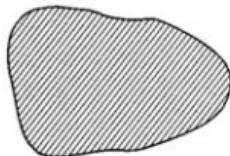
調査区西端で検出された弥生時代前期～古墳時代後期にわたる河川である。幅8.5～9m、深さ1.1～1.5mを測り、緩やかに蛇行しながら南から北へ向かう。埋土は全体的に砂質土で不安定な埋没状況を示す。最下層の砂礫層からは弥生前期後半の甕の破片、ノミ状の磨製石器（83）が出土している。その後の埋没過程で大小数回にわたる流れが形成されたと見られ、埋土の中～上層部では、弥生時代中期後半の壺（62、63）、台付鉢（64）や古墳時代の土師器・須恵器（79～82）など、各時期の遺物が混在して出土している（第12図、図版11）。須恵器壺蓋（80）は、焼きが甘く橙灰色をした土師質の須恵器である。また石製品



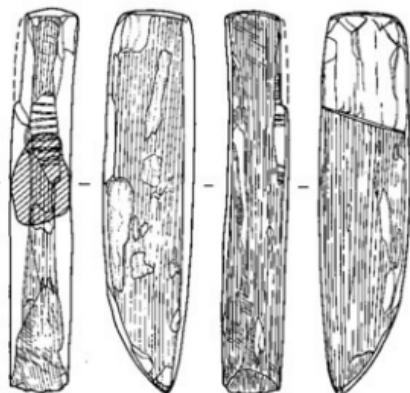
第12図 河川跡出土遺物（土器1：4，石器1：2）



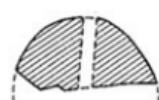
84(石英)



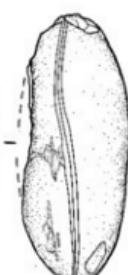
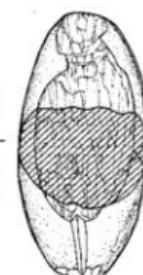
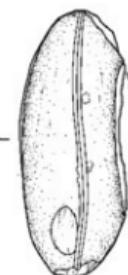
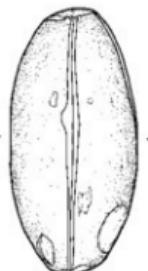
85(緑色片岩)



86(頁岩)



87(泥岩)



88(輝綠凝灰岩)

0 1 : 2 10cm

第13図 河川跡出土遺物

では凹石（84）、柱状片刃石斧（85、86）、有孔石錐（87）、有溝石錐（88）などが出土している（第13図、図版12）。

（7）溝 SD01～07

今回の調査では7条の溝が検出された。いずれも河川埋没後の溝であり、したがって古墳時代後期以降のものである。SD05からは径4.2cm、厚さ2mm程度の小形の銅鏡（60）が出土している。SD01（02）、03、05、06は幅50～80cm、深さ10～30cmの溝で、SD05と06が南西～北東方向に並走し、これを切ってSD01（02）と03が南東～北西方向に並走する。小規模な灌漑用水路として機能していたものであろうか。

3 小 結

昭和60年から4カ年5次にわたって行われた南庄・南佐古線地区の発掘調査は、全長200m以上、総面積約6,700m²に及び、いわば南庄遺跡の中心部をほぼ東西方向に貫通したと言える程の大規模な調査であり、この調査において、南庄集落の景観や変遷を復元し得るほどの数々の重要な成果があがっている。そこで今回の調査成果のいくつかを、南庄・南佐古線地区の調査成果と関連づけて簡単にまとめておく。

今回検出された河川跡は、昭和62・63年度南庄・南佐古線地区の調査で検出されている古墳時代後期の河川跡SD34、SD35や弥生河川跡がさらに北へ延びた部分にあたる可能性が強い。

南庄・南佐古線地区の調査では、弥生河川の東側で中～後期の竪穴住居跡が19棟検出されており、特に中期後半に集落の規模が最大になった可能性が指摘されている。今回の調査でも河川東側で中期後半の住居跡が4棟検出されており、当該期の集落が河川東側において広範な広がりを持つことを示すものであり、先の指摘が首肯される。

さらに南庄・南佐古線地区の調査では、弥生河川の西側に古墳時代の集落（方形竪穴住居跡、掘立柱建物跡）、東側に平安時代の集落の存在が確認されているが、今回の調査では当該期の集落（建物跡）は確認されなかった。しかし河川西側（調査区外）に古墳時代の建物跡群が存在する可能性は大きく、これらの時期の集落の広がりを確認する周辺部の調査が期待される。

今回の調査で弥生時代前期後半の土壙・土器溜まりを検出した。土壙SK21において胴部に幅広の削出し突帯を持つ壺の破片（9）が1点、逆L字形口縁甕（4）など他の遺物に供伴したが、これについては混入の可能性もあり一括資料としての信憑性に欠ける点は否

定できない。なお、現在までのところ南庄遺跡の成立は、頸部に幅広の削出突帯をもちその上面にヘラ描沈線を施す壺の存在をもって、前期中葉とみなされている。しかし前期の遺構として検出されているのは土壙と濠のみで、住居跡はまったく確認されていない。前期段階においては、大規模集落としての定着が依然見られないといった状況である。

註

南庄遺跡－南庄・南佐古線地区－の発掘調査概要については、

- (1) 徳島市教育委員会『第6回埋蔵文化財資料展 庄遺跡の人々のくらしと文化』1985年
- (2) " 『第7回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』1986年
- (3) " 『第8回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』1987年
- (4) " 『第9回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』1988年
- (5) " 『第10回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』1989年

を参考にした。

II 南庄遺跡発掘調査概要

—住宅開発工事に伴う発掘調査—

II 南庄遺跡発掘調査概要

—住宅開発工事に伴う発掘調査—

- | | |
|--------|-------------------|
| 1 調査場所 | 徳島市南庄町4丁目47番1・2 |
| 2 調査期間 | 平成3年1月10日～2月20日 |
| 3 調査面積 | 420m ² |

I 調査に至る経緯と経過

南庄遺跡は鮎喰川水系の旧河川が形成した標高T.P.+5mを測る沖積地上に位置する弥生時代～古墳時代を中心とする集落遺跡であり、市教委が1985年から5次にわたり実施した市道南庄・南佐古線改良工事に伴う調査により明確化した遺跡である。

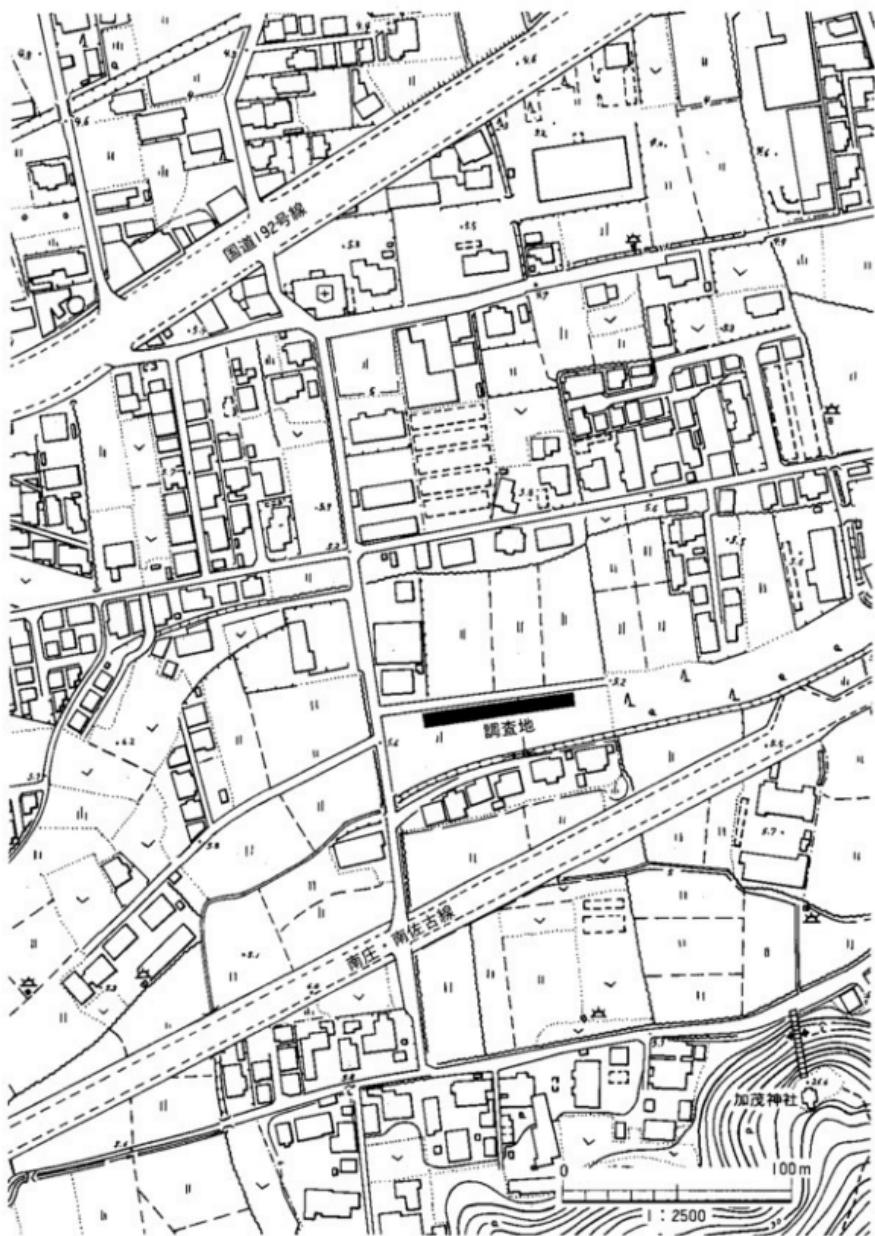
南庄遺跡では弥生時代前期～中期にかけての住居跡群が検出されており、隣接する庄、名東遺跡を含めて、鮎喰川右岸の眉山北裾地域には県内を代表する弥生時代の大集落が存在する。庄遺跡では弥生時代前期の諸遺構の検出が目立ち、当該地における弥生集落の萌芽的な存在であるのに対し、南庄遺跡では弥生時代中期以降の遺物量が爆発的な増加を見ることから、庄遺跡の集落の発展過程の様相として捉えることが可能である。ただ、住居跡群の検出例は増加し、生活領域の復原には貴重な情報を得ているものの、農耕集落としての生産地の発見が未だなされていない。弥生集落の生産基盤としての「場」の発見が期待されているところである。

弥生時代中期に興隆した集落も後期には勢力の縮小が見られ、再び当該地に集落が営まれるようになるのは5世紀後半～6世紀代にまで下る。古墳時代中期の住居跡等の遺構検出例は市内では希薄な存在であり、古墳時代の平地部における人々の活動痕跡を示す貴重なものとされる。

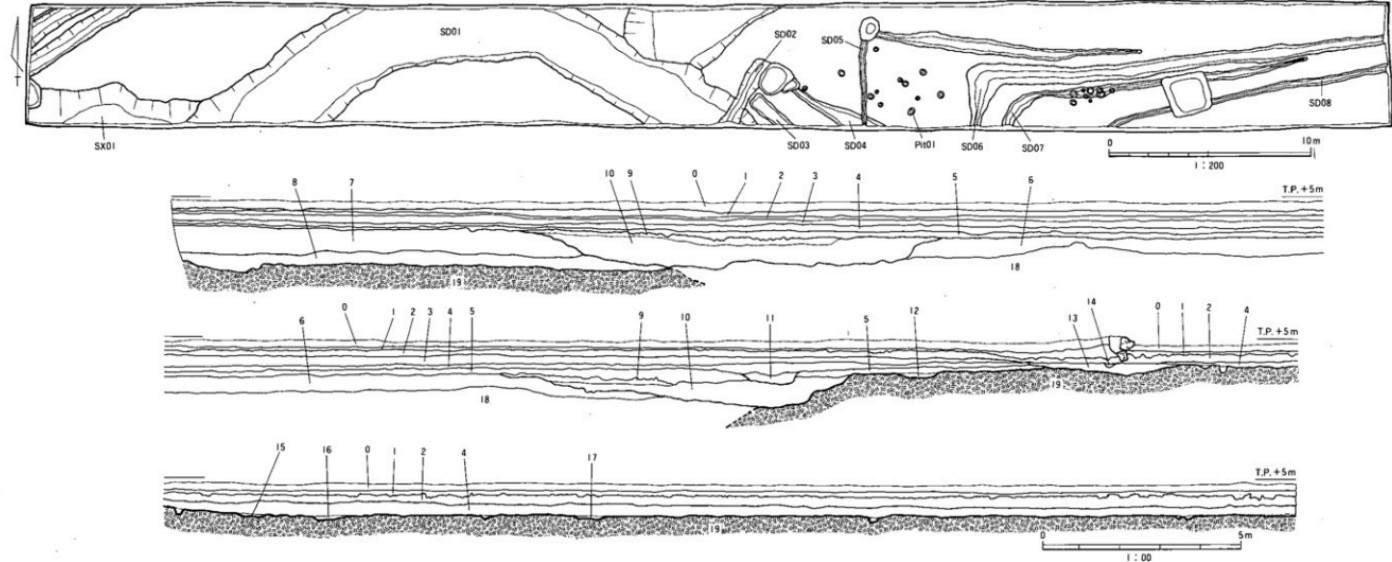
今回の調査地は、市道南庄・南佐古線より北方60mに位置し、当然のことながら、遺跡の広がりが予測された。調査は開発申請地の内、幅6m、延長70mの取合進入道路部を対象に実施した。

2 基本層序（第2図）

調査地の現地表面は標高T.P.+5mを測る。調査地における基本層序は現代水田耕土層



第一図 調査地位置図



- | | | | |
|--------------------------------------|---------------------------|----------------------|----------------------|
| 0 現代水田耕作土 | 5 にぶい黃褐色シルト | 11 灰色シルト（溝SD02埋土） | 16 桃灰色砂質シルト（溝SD07埋土） |
| 1 細色砂質シルト | 6 底オリーブ～灰色粘土質シルト | 12 桃灰色シルト（溝SD03埋土） | 17 桃灰色砂質シルト（溝SD08埋土） |
| 2 黄褐色砂質シルト（含砂層）下位にFe酸化沈殿が見られる（旧耕作土）。 | 7 オリーブ黑色シルト——（不明落込SX01埋土） | 13 灰色シルト（溝SD04埋土） | 18 増灰色砂礫（自然河灘部？） |
| 3 灰色砂質シルト（含砂層）下位にFe酸化沈殿が見られる（旧耕作土）。 | 8 底色砂礫混じりシルト—— | 14 桃灰色砂質シルト（溝SD05埋土） | 19 黄色シルト |
| 4 灰色粘土質シルト（旧耕作土）。 | 9 黄色シルト——（溝SD01埋土） | 15 雨灰色砂質シルト（溝SD06埋土） | |
| | 10 黑褐色細砂～シルト—— | | |

第2図 遺構配置図および堆積土層図

下に第1～6層が堆積する。以下、上位より概略する。

第1層 褐色砂質シルトで層厚10cmを測り、現代水田耕土のFe酸化沈殿層である。

第2層 灰黄色砂質シルトで層厚20cmを測る旧水田耕作土である。下位にFe酸化沈殿が見られる。

第3層 灰色砂質シルトで層厚25cmを測る旧水田耕作土である。下位にFe酸化沈殿が見られる。

第4層 灰色粘土質シルトで層厚10～20cmを測る旧水田耕作土である。

第5層 にふい黄褐色シルトで層厚15cmを測る旧水田耕作土である。調査地東部では堆積が見られず、削平された可能性が考えられる。

第6層 黄色シルトで遺構検出ベース層である。

3 調査概要（第2～4図）

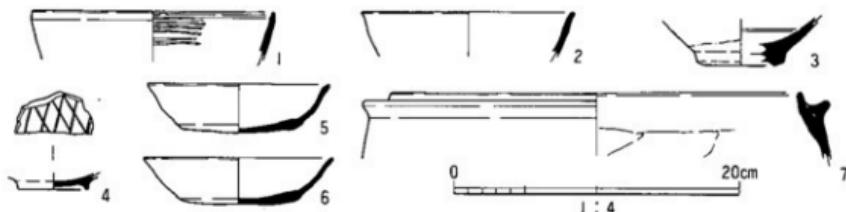
調査では第6層上面において、溝、土壙、ピット、不明落込を検出している。また、旧河道と考えられる落込も確認している。以下、主要な遺構、遺物について概略する。

(1) 溝 SD01

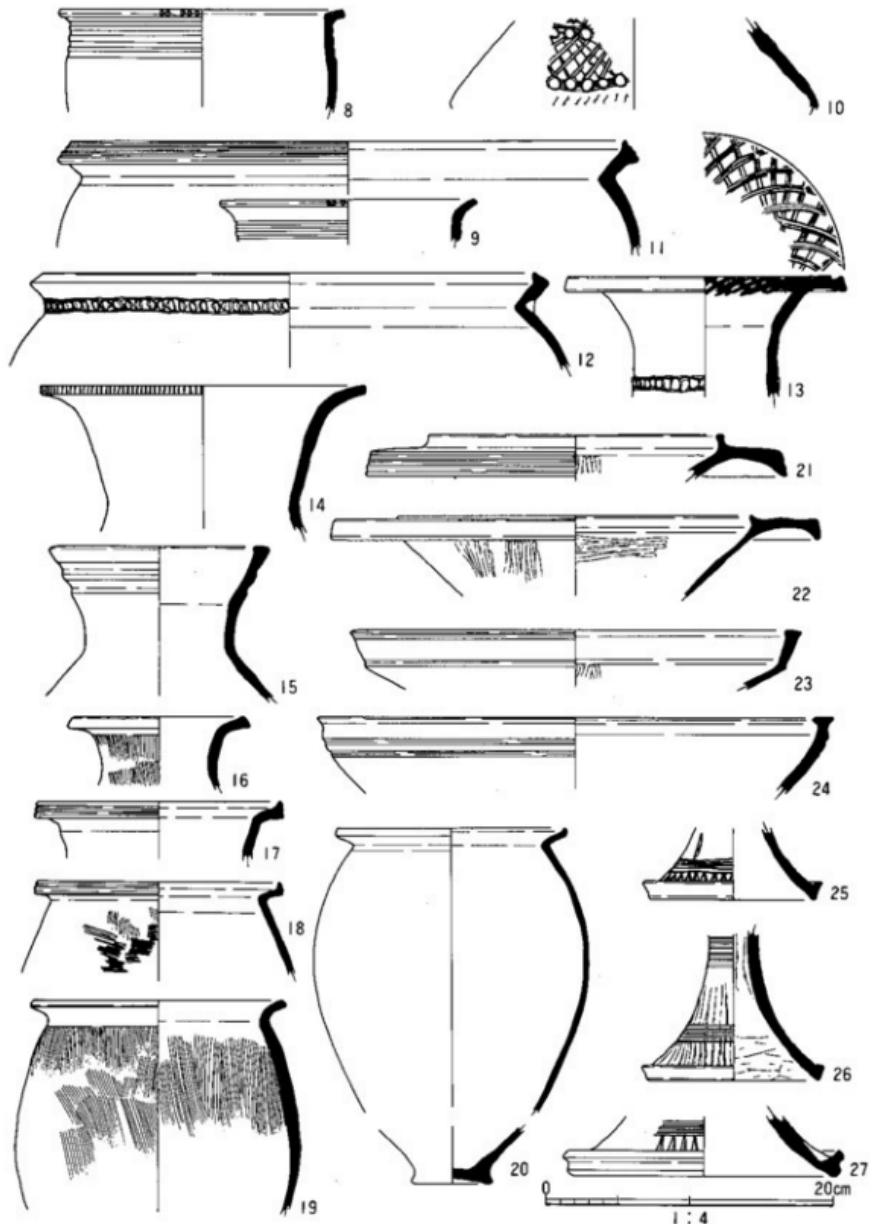
幅4.5m、深さ0.8m、断面形が浅い皿状を呈する溝である。埋土上位に黄色シルト（第6層）が堆積すること、また出土遺物の時期相が弥生土器（前期～後期）と12世紀代のものが混在していることから、周辺堆積土を利用した人為的な埋戻しが考えられる。埋戻時に両者が混在した可能性も考えられるが、周辺遺構との関係において、おそらく、12世紀中頃に埋戻により廃絶した溝であろう。

出土遺物には、樟葉型瓦器椀（1）、白磁碗IV類（2）がある。また、弥生土器（8～27）が多く量に見られる。

甕には如意形・L字形口縁部を呈し、頸部に多条沈線をもつものがある（8、9）。壺10



第3図 溝SD01(1,2), SD02(3), SD06(7), Pit01(4), 不明落込SX01(5,6)出土遺物



第4図 溝SD01出土遺物

は円形浮文とヘラ描沈線の組合せにより加飾し、広口壺13は口縁部内面にヘラ描沈線による斜格子文、14の口縁端面には刻目が施される。短頸壺15の頸部には2条の凹線が巡る。広口壺16、17は頸部から短く外反するタイプである。甕18の口縁部は斜上方に拡張し体部外面および内面にはハケ調整が施される。高壺は口縁部を水平に拡張するもの(21, 22)、壺部が皿形(23)、楕形(24)を呈するものがある。

(2) 溝 SD02

幅80cm、深さ30cm、断面形が逆台形を呈する溝であり収束する。第5層上面において検出される遺構である。出土遺物には白磁碗IV類底部片(3)がある。

(3) 溝 SD06

幅80cm、深さ10cm、断面形が浅い皿状を呈し、南北から東西方向へL字形に屈曲する溝である。溝SD06に並行して溝SD05~08が存在し、これらの溝は同様の性格を有するものと考えられる。溝SD05~08を検出している調査地東部では、第5層の削平の可能性を考えられ、少なくとも、溝SD02出土の白磁碗IV類の時期より後出する遺構であると考えられる。出土遺物には焼成不良の須恵質羽釜(7)がある。

(4) Pit01

長径40cm、短径30cmの平面形が楕円形を呈し、深さ30cmを測るPitである。出土遺物には和泉型瓦器楕底部片(4)があり、内面見込みに斜格子文をもつ。

(5) 不明落込SX01

調査地の南西隅部で検出され、調査地外へ広がる不明落込である。出土遺物には土師器壺(5, 6)がある。底部回転ヘラ切りの回転台土師器である。

4 小 結

1985年に始まる市道南庄・南佐古線改良工事に伴う調査により明確化した弥生集落を背景に控えた今回の調査では、当然のことながら、集落の広がりが予測された。しかし、弥生時代の遺構に関しては確認し得ていない。当該地での遺構の広がりが存在しないというよりも、むしろ中世以降における削平に起因するものと理解した方がよいであろう。調査地東部における第5層の欠如はそれを物語るものと考えられる。中世期の遺構については数条の溝、ピットを確認したにとどまり、建物跡等の生活領域を示す遺構の確認までには及んでない。

溝SD01の埋土堆積状況は不可解いである。本来の自然埋没過程では考え難い現象である

おそらく、出土遺物の混在もこの現象に伴うものであろう。考えられることは、溝の廃絶にあたり、周辺部で弥生時代の遺物包含層もしくはこれに該当する遺構埋土の無作為な採取が行われ、この採取土が埋戻に利用されたとすることである。さらに、土砂の採取は下層の黄色シルト（第6層）にまで達したものと考えられる。その結果、黄色シルトが溝埋土の上面を覆うという堆積土の逆転現象が生じたものと理解される。のことにより、弥生時代前期～後期の土器の混在も解決される。

溝SD01の性格については不明であるが、出土遺物には樟葉型瓦器椀、白磁碗が見られる。13世紀以降の吉野川下流域の中世遺跡において普遍的に見られる和泉型瓦器椀に対して、樟葉型や輸入陶磁が搬入される遺跡は、中世社会における何らかの政治的な背景を考えなければならない。

また、調査地東部で検出したL字形を呈する溝は区画溝の可能性が考えられ、近接地に建物跡の存在が想定される。溝および周辺遺構からは和泉型瓦器椀、須恵質羽釜が出土しており、13～14世紀代に至る当該地での土地利用が考えられる。

従来、南庄遺跡は弥生時代の集落遺跡の代名詞的な存在とされているが、今後は中世遺構に対する認識も強化しなければならない。ただ、中世遺構は後世の削平を受ける可能性が高いため、良好な状況での遺構調査が期待される。

III 庄遺跡発掘調査概要

—加茂名小学校施設建設工事に伴う発掘調査—

III 庄遺跡発掘調査概要

—加茂名小学校施設建設工事に伴う発掘調査—

- | | |
|--------|--|
| 1 調査場所 | 徳島市庄町5丁目19-11 |
| 2 調査期間 | 平成元年12月1日～12月20日（調査地I区）
平成2年7月10日～7月20日（調査地II区） |
| 3 調査面積 | 200m ² （調査地I区）・100m ² （調査地II区） |

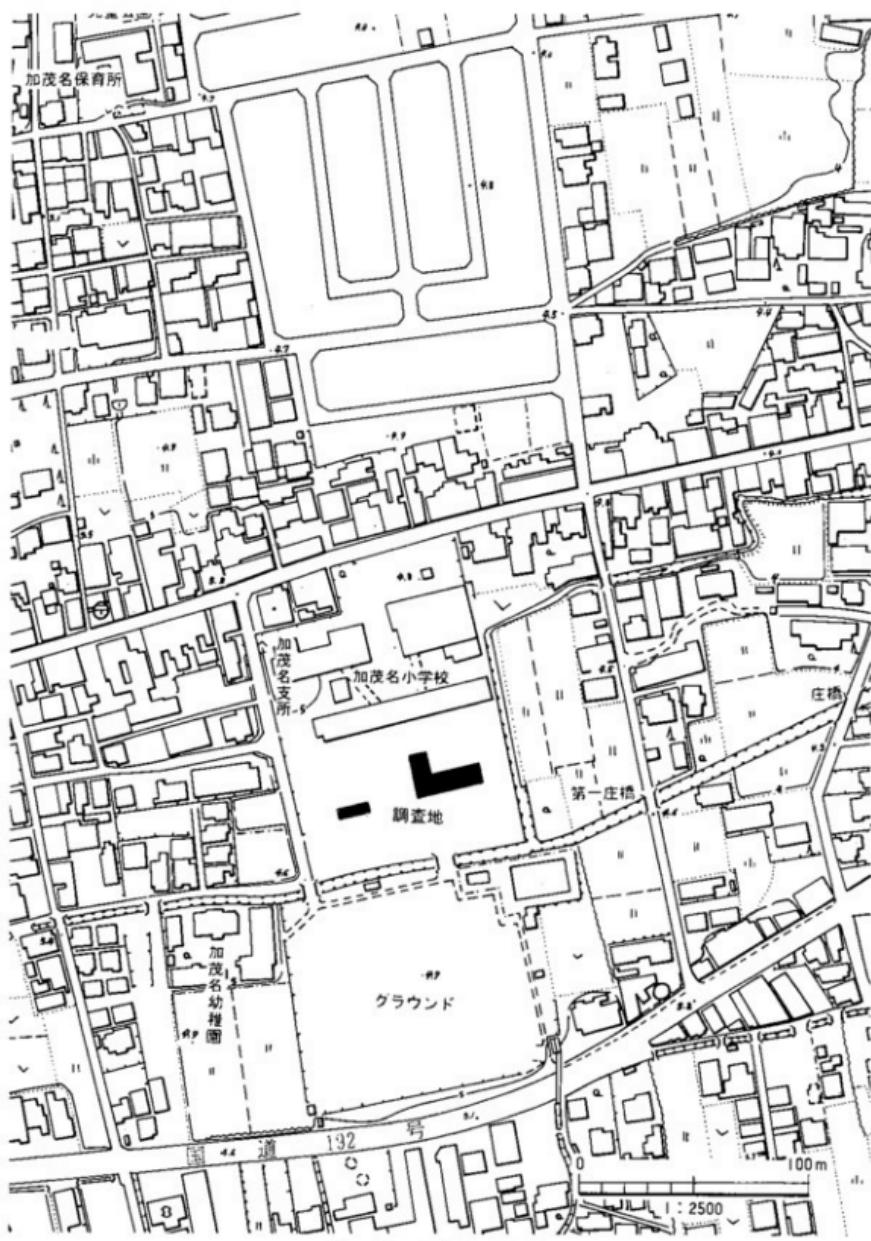
I 調査に至る経緯と経過（第1図）

庄遺跡は鮎喰川水系の旧河川が形成した沖積微高地上に位置する弥生時代前期～室町時代に至る集落遺跡として周知されている。庄遺跡での発掘調査は蔵本公園、徳島西警察署、徳島西消防署、日赤、徳島市立加茂名中学校、市道兵営西内線、徳島大学医学部構内等において市教委、県教委、徳島大学により実施されている。

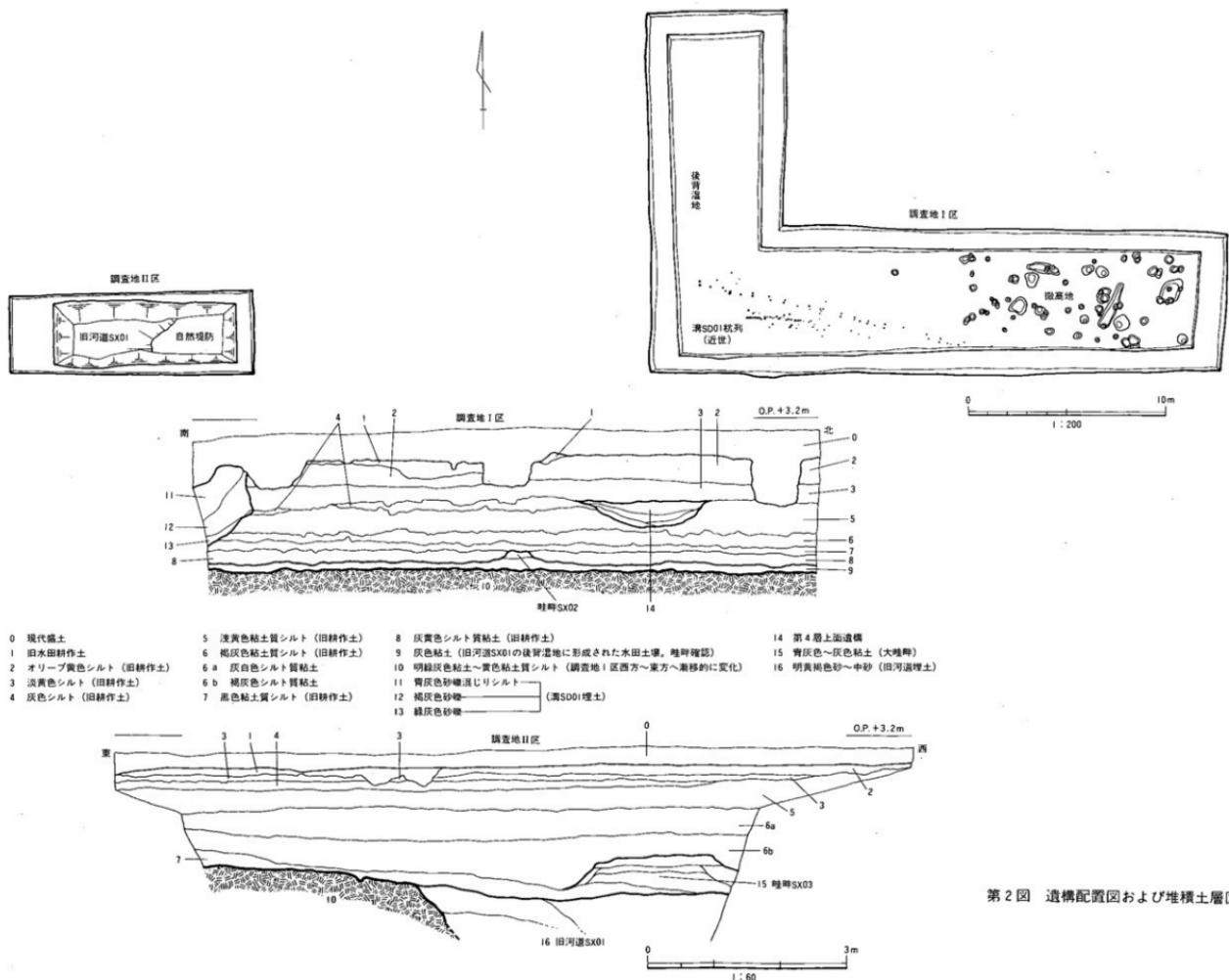
特に、徳島大学医学部構内においては、弥生時代前期の住居跡、石棺墓が検出されており、弥生時代前期の本格的な集落經營が当該地を中心とした地域で開始された可能性が強い。また、近年の調査では弥生時代前期の水路の検出例があり、灌漑用水路の可能性が指摘されていることから、今後、周辺地域において水田の発見が期待されている。従来より大量に発見されている木製農耕具の存在は、その可能性を示唆するものと考えられる。弥生時代に関して言えば、庄遺跡の南方には、弥生時代中期に爆発的な発展を遂げる集落遺跡「南庄遺跡」が隣接することから、眉山北裾部の広範囲に広がる弥生時代の大集落の萌芽的な存在である。

周辺地域での現地表面の標高は、眉山北裾地域ではT.P.+5mを測るが、国道192号線付近ではT.P.+3.8mにまで低下する。さらにJR徳島本線付近では極度の低湿地化の様相を示すことから、遺跡は国道192号線以南の地域にはば括されるものと考えられる。

ただ、前述したように、従来の調査は国道192号線以南の地域に限られていた経緯があるが、今回の調査地は国道192号より150m北方に位置することから、庄遺跡の北方への広がりの把握ならびに当該地の古環境の復原を想像することにおいても貴重な意味を持つものである。調査では、旧河道、水田跡（共に時期に関しては明確ではない）、江戸時代末期～明治時代の溝を検出している。なお、旧河道に関しては、調査地が狭少のため、落込の確認



第1図 調査地位置図



第2図 遺構配置図および堆積土層図

にとどめている。

2 基本層序（第2図）

調査地における現地表面の標高はT.P.+3.2mを測り、国道192号線沿いよりさらに低下する。調査地での基本層序は、現代盛土層下に第1～10層が堆積する。なお、現地調査では、調査地I-II区が20m離れて位置することから、層位の連続を確認し得ていないが、ここでは、共通層序として捉えた。以下、上位より概説する。

- 第0層 現代盛土
- 第1層 旧耕作土で層厚15～20cmを測る。
- 第2層 オリーブ黄色シルトで層厚20～40cmを測る旧耕作土。
- 第3層 淡黄色シルトで層厚15～30cmを測る旧耕作土。
- 第4層 灰色シルトで層厚20cmを測る旧耕作土。上面にて溝状遺構を確認。
- 第5層 浅黄色粘土質シルトで層厚40～50cmを測る旧耕作土。
- 第6層 褐灰色粘土質で層厚20cmを測る旧耕作土。調査地II区では層厚が増し、色調変化において細分される。
- 第6a層 灰白色シルトで層厚40cmを測る。
- 第6b層 褐灰色粘土質で層厚40～80cmを測り、上層より色調が暗。
- 第7層 黒色粘土質シルトで層厚20cmを測る旧耕作土。
調査地II区において上幅1.2m、下幅3.2m、断面高60cmを測る南西～北東方向の畦畔SX03を確認。
- 第8層 灰黄色シルト質粘土で層厚15cmを測る旧耕作土。調査地II区では堆積が見られない。
- 第9層 灰色粘土で層厚15cmを測る旧耕作土。
調査地I区において上幅40cm、下幅80cm、断面高30cmを測る北西～南東方向の畦畔SX03を確認。調査地I区の中央部以東および調査地II区で堆積が見られないことから、旧河道SX01の後背湿地の堆積土壤と考えられる。当初の水田耕作は小規模経営であったと考えられる。
- 第10層 明綠灰色粘土～黄色粘土質シルトである。
調査地I区の微高地では黄色粘土質シルトであるが、調査地I区中央部から西

方、調査地II区においては、土壤の還元現象により土壤が明緑灰色への漸移的な色調変化が見られる。

3 調査概要（第3～6図）

調査では第10層上面において溝杭列、土壤、ピット、旧河道を検出している。また、断面観察ではあるが、水田畦畔を確認している。以下、主な検出遺構、出土遺物について概略する。

(1) 旧河道 SX01

調査地II区において検出した南西～北東方向の旧河道である。調査地が

狭少のため右岸の落込部を確認したにとどまる。出土遺物がなく時期に関しては不明であるが、旧河道埋土上面より黒色土器壺(1)、土師器皿(2)が出土している。壺1はA類無高台であり、皿2は底部ヘラ切の回転台土師器である。

(2) 畦畔 SX02

調査地I区において断面観察により確認された上幅40cm、下幅80cm、断面高30cmを測る北西～南東方向の畦畔である。

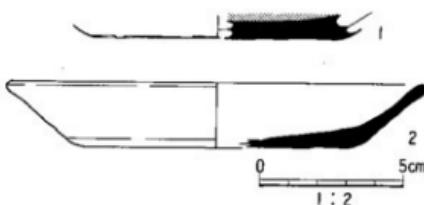
(3) 畦畔 SX03

調査地II区において断面観察により確認された上幅1.2m、下幅3.2m、断面高60cmを測る南西～北東方向の畦畔である。旧河道SX01埋没後、旧河道と同方向に構築された大畦畔であり、規模、立地を考慮すれば、耕作地の縁辺部で水利、水防に関する機能を果たしていた可能性が考えられる。

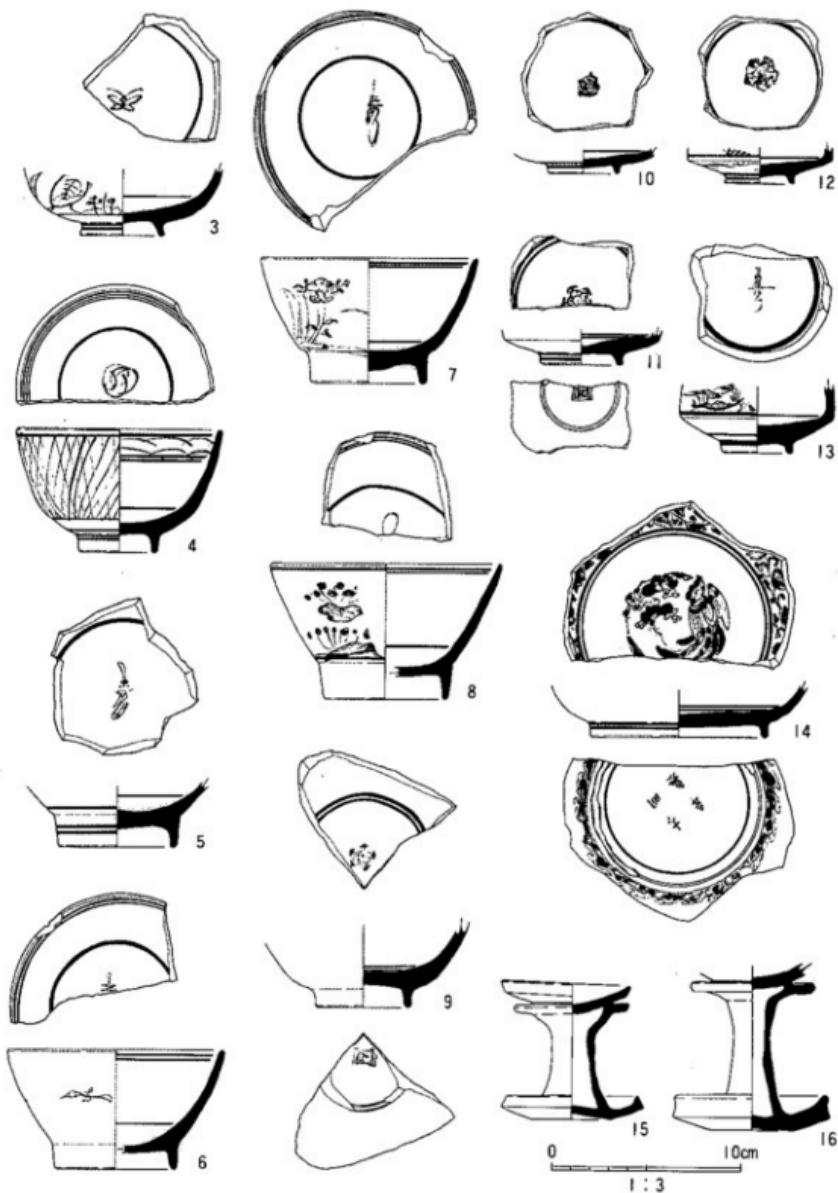
(4) 溝 SD01

調査地I区において杭列が検出された北西～南東方向の溝である。「明治十年」銘の硬貨が出土しており、加茂名小学校建設に伴う造成工事を受けるまで使用されていた水路と考えられる。

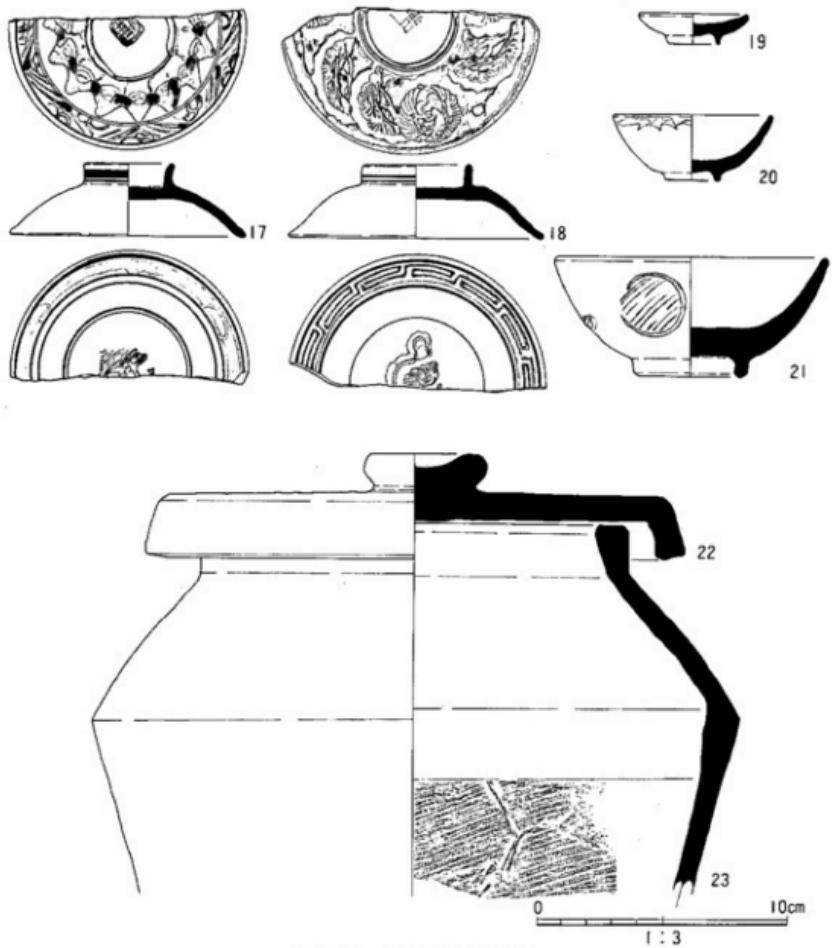
出土遺物には、肥前染付碗(3～8、21)、肥前青磁碗(9)、肥前染付筒形碗(10～13)、肥前染付皿(14)、大谷産灯火具(15、16)、肥前染付蓋(17、18)、肥前白磁紅皿(19)、肥前染付紅皿(20)、瓦質壺蓋(22)、瓦質火消壺(23)がある。



第3図 旧河道SX01出土遺物



第4図 溝SD01出土遺物



第5図 溝SD01出土遺物

碗3の見込みの蝶文は手描きによるものである。碗4の外面には斜格子文、見込みには渦福が描かれる。碗5～8はいわゆる「広東碗」と呼ばれる器形であり、いずれも見込みには「寿」字が描かれる。碗9の見込みには手描きによる五弁花文、外面底部には二重方形枠を持つ渦福が描かれる。碗21はいわゆる「くらわんか」手のものである。筒形碗10、11の見込みには手描きによる五弁花文、筒形碗12の見込みにはコンニャク印判による五弁花文、筒形碗13の見込みには「寿」字が描かれる。また、筒形碗11の外面底部には二重方

形枠を有する渦福を持つ。皿14の見込みには鳳凰文、外面底部には「太明年製」銘が見られる。蓋17、18は端反碗に対するものであり、内底部には「乾」字が描かれる。17、18はコバルトの青味の強い呉須を使用している。おおむね江戸時代末～明治時代初頭のものである。

4 小 結

今回の調査では庄遺跡の北方への広がりを確認したものの、調査地での遺構検出ベース層がT.P.+0.8mへ低下すること、および旧河道の存在から、周辺地域での低湿地化への移行が窺われる。

第9層の畦畔の確認は当該地が当初より農耕地としての開発を受け、生活領域としての利用はなされなかったものと考えられる。また、前述したように、第9層が旧河道SX01の後背湿地層と考えられることから、当初の水田経営は自然地形を利用した比較的小規模なものであったのかもしれない。しかし、耕作地の開発はやがて周辺地域へ拡張され、大規模な畦畔構築を伴う本格的な土地改良が実施されたものと考えられる。断定は避けるが、旧河道埋土上面において黒色土器A類の坏が出土していることから、9世紀中～後半頃に当該地での農耕地の開発が行われ、以後、近世に至るまで農業生産地としての土地利用が行われているものと考えられる。さらに、庄遺跡の北方には、中世集落としての中島田・南島田遺跡が位置することから13世紀後半以降における鮎喰川下流域での広大な低湿地帯に進出した土地開発の前哨的な姿として捉えることも可能である。そして、庄遺跡の低湿地帯における土地開発を支えた社会的背景や要因は、やはり從来、主体的に実施されてきた国道192号線以南で検出される諸遺構に求めなければならないであろう。

ただ国道192号線以南の調査に対し、低湿地帯での調査は土壤が類似層の連続堆積を呈し、砂層等の間層が見られないため、各水田面および畦畔の検出作業には非常な困難が予想される。しかし、明確な水田畦畔の検出は避けることのできない問題であり、古代・中世の条里制の問題にまで波及するものと考えられる。発掘調査において的確にクリアされることにより、明確な歴史復原が可能とされるであろう。

I 南庄遺跡発掘調査概要

—マンション建設工事に伴う発掘調査—

南東より

一覧図

調査地全景





土壤SK15 壺（2）、壺（3）出土状況

北より



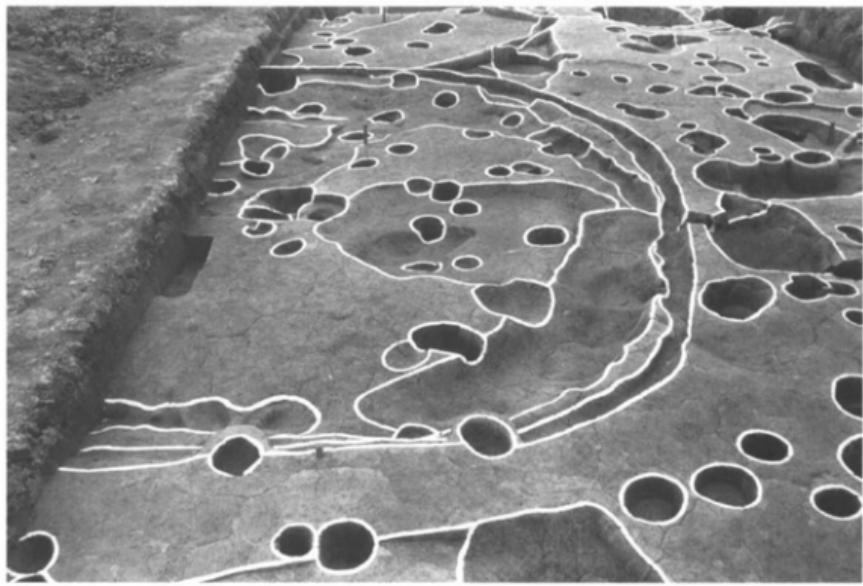
土壤SK21 壺（5、6）、壺（8）、石製品（1）ほか出土状況

西より



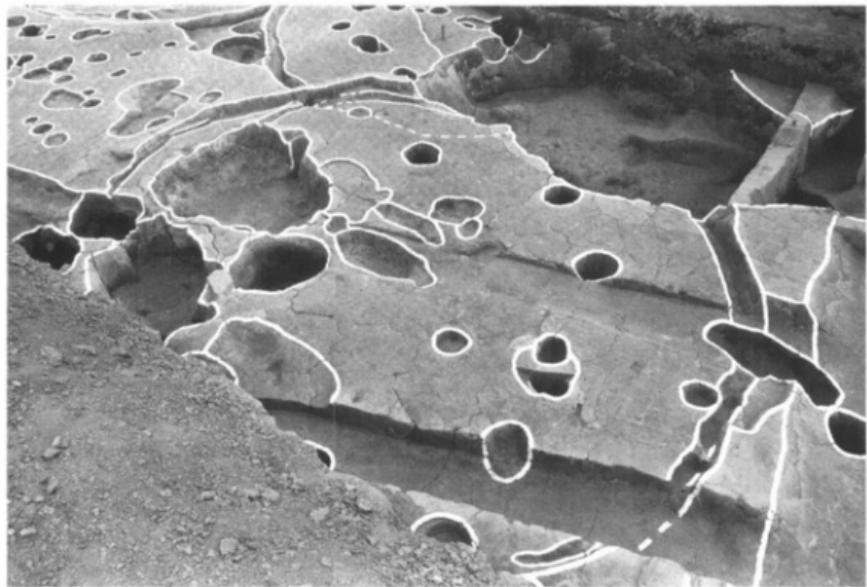
土壤SK23 壺（10, 11）、壺（12）ほか出土状況

南より



竪穴住居跡SA01

東より



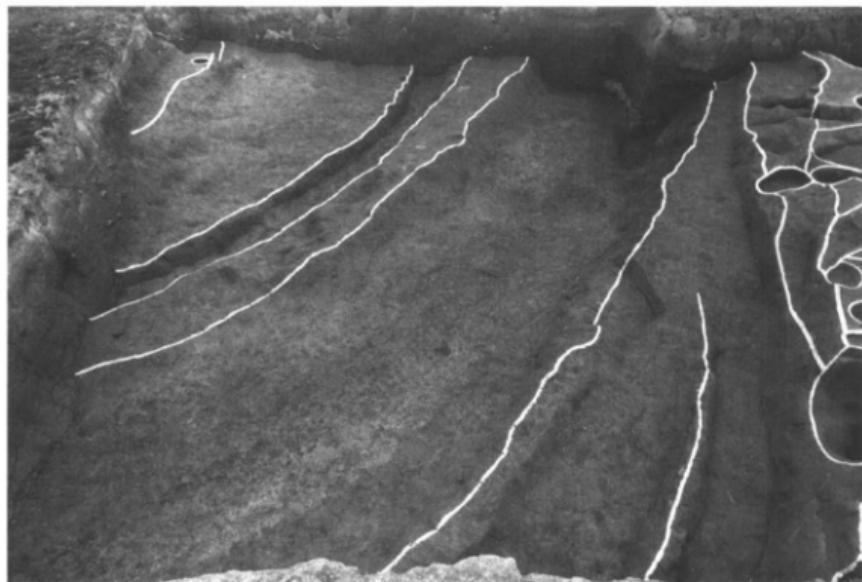
竪穴住居跡SA02

北西より



竪穴住居跡SA02 垚(27), サヌカイト剥片出土状況

北より



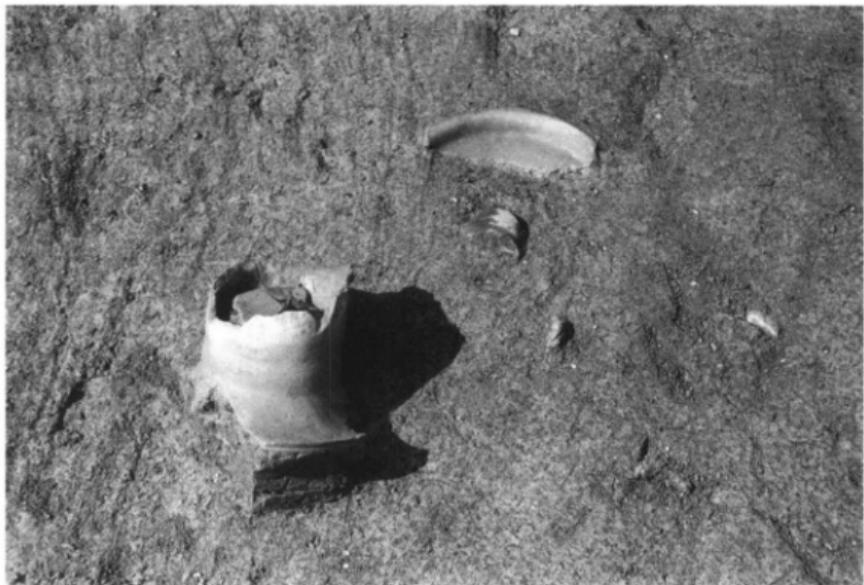
河川跡

南より



河川跡 埋土上層 壺（75, 76）出土状況

北より



河川跡 埋土上層 壺 (65, 67), 太型蛤刃石斧片出土状況

南より



溝SD01, 03, 05, 06, 堅穴住居跡SA04ほか

北より



2



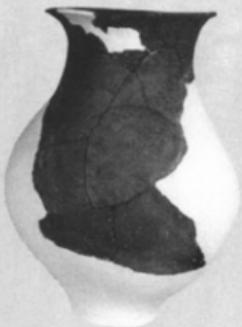
3



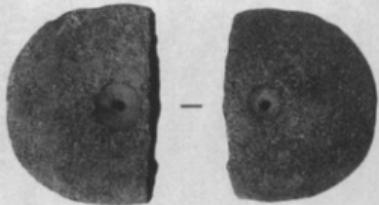
5



7



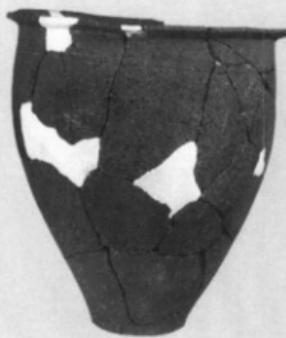
8



—

1

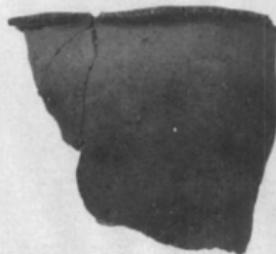
土壤SK15 (2, 3) SK21 (1, 5, 7, 8) 出土遺物



10



13



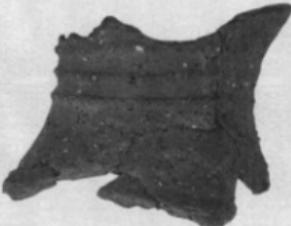
11



15



12



16

土壤SK23 (10~12), 土器溜りSR01 (13, 15, 16) 出土遺物



21



29



26



30



27



18



19



20

堅穴住居跡SA01(18, 19, 21), SA02(26, 27), SA03(29, 30), 土壌SK04(20) 出土遺物



31



32



34



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47

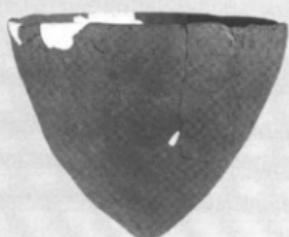
竪穴住居跡SA01 (31~33), SA02 (34~47) 出土遺物



64



75



69



76

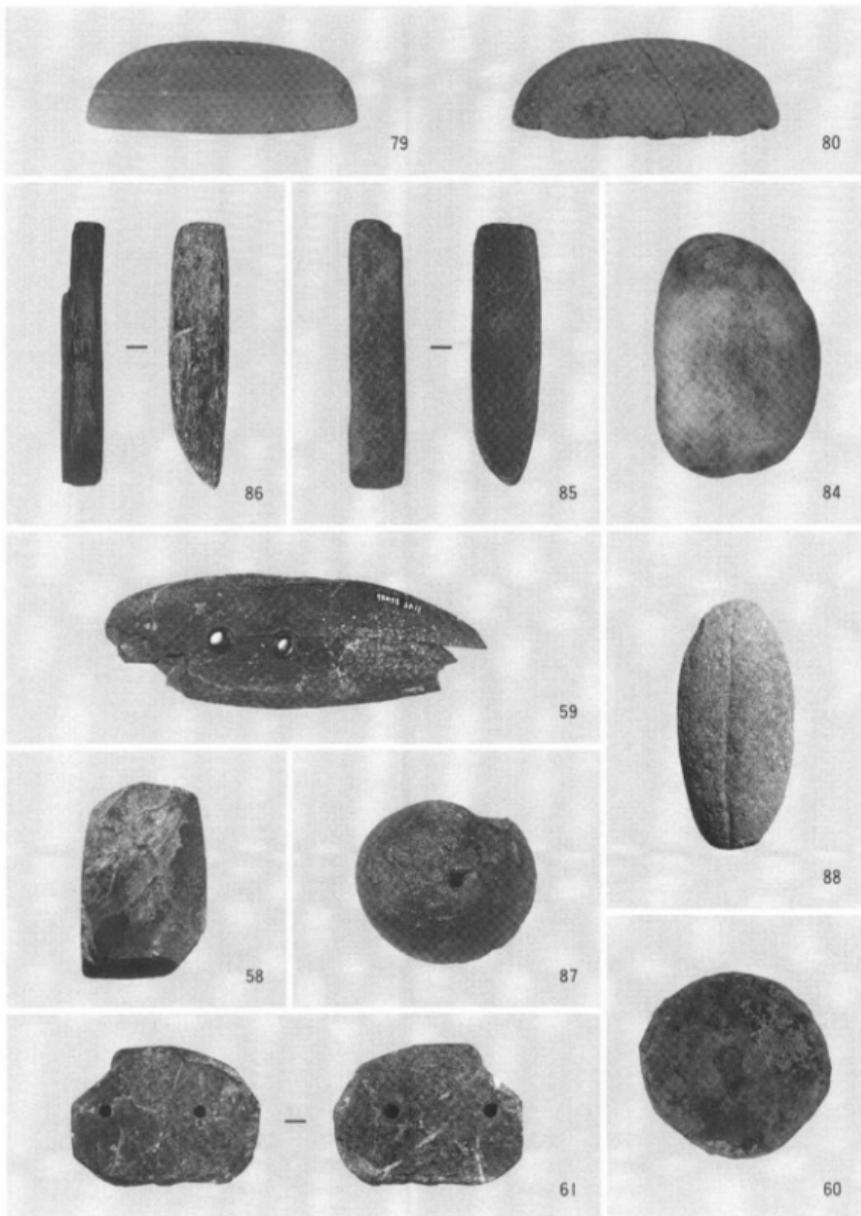


72



77

河川跡出土遺物



河川跡(79, 80, 84~88), 土壤SK03(58), SK08(61), SK13(59), 溝SD05(60) 出土遺物

II 南庄遺跡発掘調査概要

—住宅開発工事に伴う発掘調査—



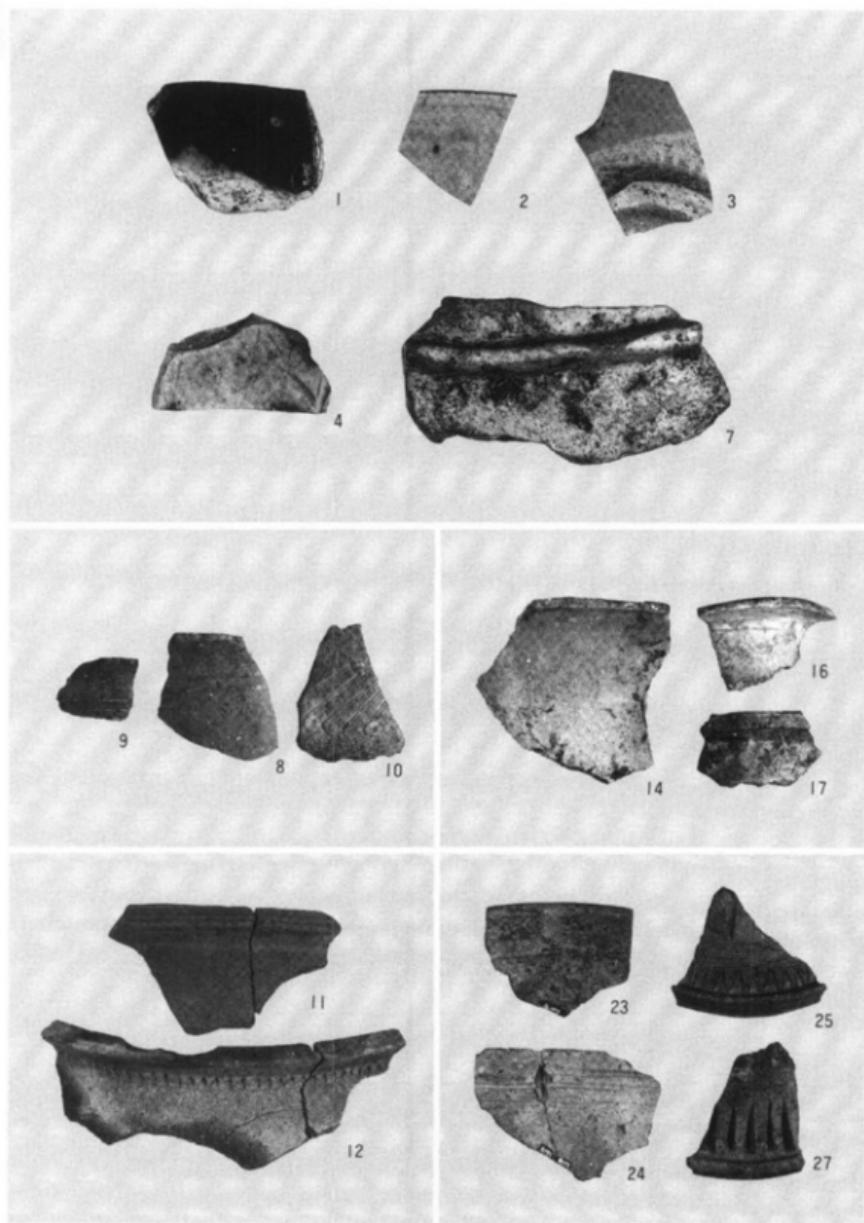
調査地全景

東より



調査地西部検出造溝

東より



滿SD01(1, 2, 8~12, 14, 16, 17, 23~25, 27), SD02(3), SD06(7), Pit01(4) 出土遺物

III 庄遺跡発掘調査概要

—加茂名小学校施設建設工事に伴う発掘調査—



調査地Ⅰ区検出遺構

東より



溝SD01杭列

西より



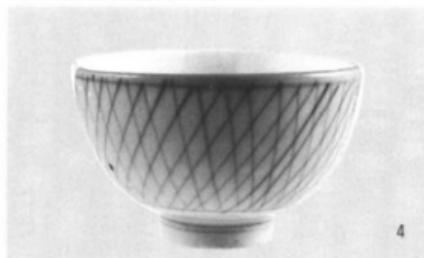
調査地II区全景

西より

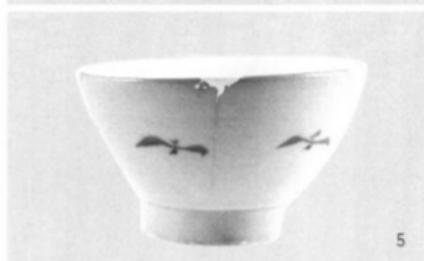


旧河道SX01落込部

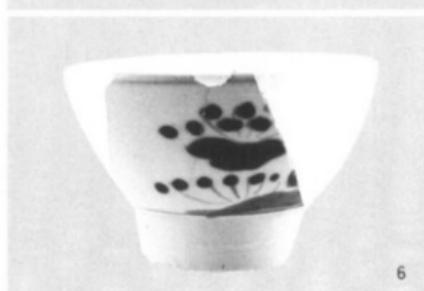
北西より



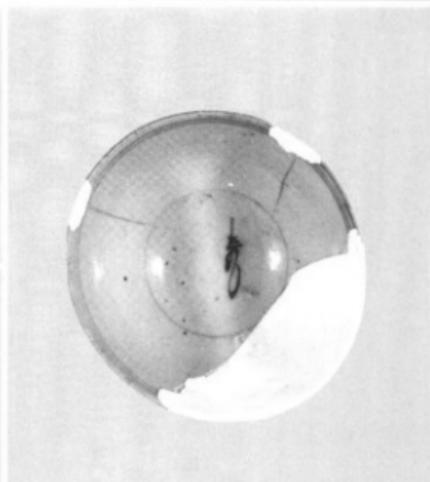
4



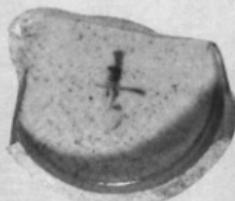
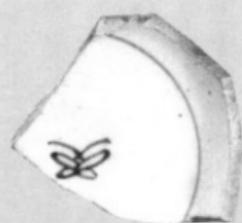
5



6



溝SD01出土遺物



溝SD01出土遺物



14



15



17



18



16



19



20



21

溝SD01出土遺物

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 5

1995. 3. 31

編集 徳島市教育委員会社会教育課

発行 徳島市教育委員会

印刷 株式会社松下印刷